

問題提起

情報通信と放送の融合とその視点

中 村 清

本日はたくさんの方にお集まりいただきまして感謝申し上げます。本日の論題は情報通信と放送の融合ということです。

今から10年ほど前になりますが、1990年5月はテレビの関係者にとっては大変大きな出来事が起きました。すなわち米国でジェネラル・インストルメント社が高画質のテレビ画像のデジタル圧縮送信に成功したのです。それから10年の間にこの技術が大きく花が咲き、また将来へのいろいろな可能性を秘めた技術として成長してきました。その結果、市場構造が大きく変わりつつあります。とりわけ宛名先のついたネットワークの拡大は著しく、個人ベースまで広がってきています。まさに@型ネットワークの拡大と呼んでいいかと思います。

もうひとつ大きな構造変化の特徴は、3つのレベルにおける構造変化が起きているということです。1つはインフラ・ネットワークで、これは基本的には無線、有線、あるいはそのハイブリッドという形で起きています。

それからコンテンツですが、これも大きく変化を遂げようとしています。さらに個人の携帯電話、あるいはそれに近い端末機器も大きな変化を遂げてきています。インフラのネットワークにつきましては、これから議論いただくわけですが、有線の中では、ケーブルテレビ、電話のみならず、将来は上下水道、電力、ガス等のネットワークも通信・情報・放送のネットワークとして拡大する可能性があります。

無線につきましては、デジタル衛星放送、そして2003年に計画されているデ

デジタル地上波、さらには本日議論の中心であります携帯電話がネットワークとしての存在感を強めています。さらにハイブリッドとしては情報家電、冷蔵庫や洗濯機などがネットワークとして位置づけられます。あるいはゲーム機器もかなり大きなネットワークを形成する可能性があると考えられています。

その結果、当然のことながら企業行動も大きく変わります。これまでのようにマーケットシェアをめぐる競争よりもむしろ「パイを大きくしていく」、すなわち「パイの切り方よりもパイをいかにして大きくしていくか」というシステム競争の時代に入っていると考えられます。

現在、エンターテインメント系のサイトでどんなことが起きているかについて触れてみたいと思います。2000年12月に900万人が見たといわれるマドンナのインターネット放送がありますが、ここから放送と通信の融合の可能性が読み取れます。また2001年の7月7日に東京ドームで開かれました浜崎あゆみのコンサートはビー・バット、すなわちNTT 東というネットワーク会社と日本テレビというコンテンツ会社が共同での出資した会社ですが、この2つの異なったレベルのネットワークがインターネット上での公演を企画して、約2万4千枚のチケット完売をし、その後さらにチケット数を増やしたと聞いております。

こうした大きな構造変化と行動変化が見られるという現状を考えますと、一体これから「どうなるのか」という疑問が当然わいてまいります。それからもうひとつはこれから「どうするか」という疑問も当然ながら起こるわけです。そこでまず初めに「どうなるか」から話を始めさせていただきたいと考えます。